

# Leon Kellner著、Introduction on Caxton's Syntax, Style, etc.の抄訳 (1)

大槻 博

ここに訳出したのは、Leon Kellner (1859-1928) 編の*Caxton's Blanchardin and Eglantine* (EETS 58)に収めてあるIntroduction on Caxton's Syntax, Style, etc.の抄訳である。特に出典に記載のない限り、例文は*Blanchardin and Eglantine*からであり、--/--の前の数字は本書(EETS58)のページ数、後ろの数字は行数である。Kellnerの例文には該当する語句にイタリックが施されているが、それが無い箇所がある。その際には訳者がイタリックにした。項目の後ろのローマ数字は本書のページ数である。

## 1 品詞の使用(v)

### § 1 名詞と他の品詞との関係(v)

論理的には、全ての品詞にはその固有の領域があり、その用法は厳密に制限され、他の品詞とは異なる働きをするべきである。しかし実際は言語は常にアリストテレスが引いた線内に収まることはない。短い名詞と動詞は、殆ど全て名詞、動詞、形容詞として使うことができるということ、殆ど全ての形容詞は名詞として使用が可能である。すなわち、a plant, plant-life, plant-culture, to plant; tea, tea-district, we'll tea you at our tent; love, love trifles, to love; his English, English ways, to English; the true, the beautiful; true that lineなどである。

古期英語では、語形を変えないで、名詞と形容詞の二つの品詞として使わ

れた語がある。earfothはdifficultyとdifficultの意味で、leohtは名詞としてのlightと形容詞としてのblight、weorth(=worth)は名詞と形容詞として、yrre(=wrath)は名詞と形容詞として使われた。全ての形容詞は単数と複数の名詞として、また原級、比較級、最上級が名詞として使われた。不定詞と動詞状名詞(-ung, -ing)は名詞として使われた。理論的には今日の全ての文章語は、文法と文体の面で論理という法則を守るべきであり、全ての品詞は出来るだけその固有の領域に制限されるべきである。しかし、実際は上で述べたように、話し手や書き手は言語を自由に使用したが、実際自由に言語を使用している。カクストンと彼と同時代の人々は、細部に渡って論理に縛られることを望まなかった。私はこの書で、名詞と他の品詞との関係を記述する。

## 1 名詞の形容詞的用法(v)

この用法は近代英語でもqueen-mother, queen-dowager, lord-lieutenantのような例はある。これらの例では、queen, lordは複合語の一部としてよりも、同格として見なすべきである。また、fellow-creature, deputy-marshal, champion-scullerのような例では、fellow, deputy, championは形容詞として使われている。しかし、この用法は近代英語では韻文や歴史に題材を求めたロマンスの古風体は別にすると、日常の会話では使われることはあまりない。カクストンは同格の用法を自由に使っている。the paynem kyng Alymodes, 38/2, 90/25, 133/11; a man straunger, 43/9(原文はhomme estrange); a knyght strauger, 51/19, 125/33; kinge sarasyne, 129/8(sarasynは形容詞でもある。131/15), kyng prysoner, 148/5; felon conspiratours, 178/16; felon paynems, 189/1; felon enmyes, 205/25.

このような用例は中期英語にはよくみられる。チャーサーの例として、a coward ape, III.198; felon look, V.9 があり、*Gesta Romanorum*からの例として、the fole knyght, p.20; lorell knaue, p.80; a leper man, p.190; the trai-

tour servant, p.316があり、*Morte Darthur*からの例として、queens sorceresses, 187/27がある。

同格としての用法は16世紀には稀となり、その後使われなくなった。しかしその後、口語でなく、文語で復活した。Bernersは*Huon of Burdeux*で、a felon traitour, I.5/4; thou false traitour knyght I.41/26の例がある。しかし1601年の版では、後者はtrayterous knyght(=Traitor knight)と変更されている。このような表現はその後の多くの韻文やロマンスで見られる。しかしそれは多少とも古風体と意識される。

## 2 形容詞の名詞的用法(vi)

今日の形容詞は、古期英語期さらには中期英語期の最初に200年間と比べると、その力と独立性をかなりなくしている。以前は形容詞にも屈折があり、今日なら名詞を共に使用される所で、形容詞で表した。例えば、se góda(=the good man), thæt gód(=the good, 悪に対して)、thá gódan(=the good ones, the righteous)である。今でもthe good and evilo'dan(=the good ones, the righteous)である。今でもthe good and evil of this life, of adversityなどや、the good(pl.) shall be happy, the evil(pl.) miserable, hereafter.という表現がある。しかし屈折が消滅した結果、曖昧でないようにするために、形容詞の名詞的用法は、ある程度失われた。近代英語では散文で、人に関して、複数で、曖昧でない時に使われる。例えば、the poor and the richは常に複数であり、聖書では単数であり、文脈から曖昧ではない。カクストンの形容詞の用法は、この点でおおよそ現代と同じである。

形容詞の名詞的用法は次のように分類できる。

(a) 大抵は人に関してであるが、形容詞は具体名詞を表している。

*specyall*=friend, 84/34, これ以外の箇所では形容詞として使われている。  
frende *specyall*, 72/10, 73/30, 75/9.

*crystem*=christians, 154/1, 183/31. (*crysten men*, 140/2)

*famylyyer*=intimate friend, That night noon of them alle, were he neuer so moche her *famylyyer*, cam to see her, 51/16.

*the quycke*=the quick (living) flesh, loue smote her ayen wyth a darte to *the quycke* tyll herte of her, 67/32.

*his elder*=his elders, He passed them that were *his elder* in age, 13/21.(原文は、les plus sagies de soy).

(b) 形容詞が抽象名詞としての使われている。(vii)

形容詞の原級が抽象名詞として使われることは稀である。Casuall fryuolles, 44/21. これは古フランス語のfrivoleancesの翻訳である。yet ought ye to maynten and holde *thapposite*, 44/17; in certayne, 97/1.

この用法は次のような形容詞がある。

a, 言語 *frenshe*, 1/24; *englysshe*, 1/24.

b, 色彩 *in red*, 64/10, 164/5.

c, ofを付加した形容詞は副詞として使用される *of fresshe*, 164/12, 165/21; *of newe*, 100/26, 147/18, 195/7. 後者は中期英語で*newes*である。(Story of Gen. and Exodus(ed.R.Morris), 1.240. *of lyght*=lightly,129/33.

形容詞の比較級が使用されている例が一つある。men must suffre, for *better* to haue, 68/25.

しかし最上級ではかなりよく見られる。the *thykkest* of the folke=the *thykkest* press, 42/6, 59/5, 106/8, 167/16; it is for your best, 44/23; he sholde do the *best* and the *worst*, 48/16; at the *last*,188/20.

### 3 前置詞の名詞的用法(viii)

Her best biloued(=Blanchardyn) was alle redy com to *his aboue* ouere Rybyon, 85/3; *his aboue*(次の2行にもみられる)、フランス語の*au-dessus*の

訳である; they were come to *their aboute* of their enmyes, 142/32; ye are therof come to *your aboute*, 149/27.

#### 4 副詞の名詞的用法(viii)

*Blanchardyn*には一つの例がある。he had called alle his barons and lordes, and alle the gentylnen of *there aboute*, 98/16. 現代英語ではthe whereaboutである。ye shall now here and understande from *the hens-fourthon* a terryble and a pyteous songe, *Aymon*, 59/5.

#### § 2 抽象名詞が具体名詞として、具体名詞が抽象名詞として使われている。(viii)

論理的に言えば、名詞は具体と抽象を分けられる。しかし、韻文だけでなく、簡単な散文でも、現在と同様に具体と抽象は区別なく使われる。

(a) 抽象名詞が具体的な意味で。

*counseyll* (現在と同様) =F.*conseil*. (She) spake at that same owre wyth *certayne of her counseyll*, 76/32.

*chivalrie*=knights. I do yelde and delyuere into your handes the kyng of Polonye, your enemye, whiche I haue taken with the helpe of your sone, and of your noble and worthy *cheualrye*, 108/34. Cf. *Morte Darthur*, 47/22.

*love*=lover, sweetheart (現在と同様), 25/2, 26/15; lover; 30/14 も使われている。

*grace*=gracious person, I presente this lytyl book into the noble *grace* of my sayd lady, 1/7, 8. (今日Her Grace, Your Graceが使われる。)

動詞状名詞の-ingは本来は抽象名詞であるが、具体名詞となることがよくある。

*clothing*=clothes, 148/18, 159/32. (聖書に*her clothing* was of wrought gold.)

*kyssing*=a kiss. That one onely *kyssyng* that I toke of yow, 134/8.

次の文の *helpes* は正しいのか、*helpers* の誤植なのかは不明である。(原注: *lady-help* や *help* はアメリカ語法で「召使い」の意味である。) *Would Subyon or not, and all his helps, the noble lady was taken out of his power, 197/21. Helpe=helper* というのは、疑わしい。というのは、私が知る限りでは、カクストンではどこにもそのような用法はみられないからである。しかし *Story of Genesis and Exodus, 1.3409* ではこの意味で使われている。

勿論 *helpe* は *help* と混同されるべきでない。後者は抽象的、前者は具体的である。cf. *hunte=hunter. Chaucer, Knight's Tale, 1160.*

抽象名詞が具体性をもって使われることは、中期英語ではそれほどみられない。

Chaucerの例、*message=messenger, Man of Law's Tale, 333.*

Langland(*Piers Plowman*)の例、*retynaunce=a suit of retainers. Skeat, Notes to P.Pl., p.46.*

*treuthe=a true man, a righteous man, Skeat. l.c.297.*

近代英語でも例は幾つかある。*justice=judge, a witness* である。

(b) 具体名詞を抽象名詞として。(ix)

*Blanchardyn* に一例がある。*chief=beginning: or euer he myght come to the chyeff of his enterpryse, 17/4. chief* は *cap(caput)* のことで、これは *heafod(=head)* である。Cf. *Morte Darthur 144/8: ther by was the hede of the streme, a fayre fountayn.*

*field=battle*, これは *Morte Darthur 172/17* にあり、17世紀のエリザベス朝の作家によく使われた。

### § 3 数(ix)

全ての名詞が単数と複数の両方で使うことはできない。単数しか使えないの名詞があり、複数でしか使えない名詞がある。一つのを複数形で表す

名詞(pluralia tantum)は、bellows(ふいご), gallows(絞首台)などのように近代英語で多くみられるが、Blanchardynではみられない。tydingeは単数にも、複数にも使われている。gallowsは三度使われている。he shold doo make and to be sette up a galhouse,187/24; to make him deye upon the galhouse,189/3; (he) sawe a payre of galhouse, 188/2がある。フランス語ではles fourchesである。綴りについては、*Four Sons of Aymon*, 331/22にみられるように、カクストンはgallowとhouseと結びつけ、最初の例にみられるように、不定冠詞aが使われており単数である。

単数形と複数形で使われている例が幾つかあり、それらは今日のようにfootは除いて、複数の意味で使われている。Men see atte eye his beaulte, 54/34, 118/1,10; which of heyght was XV fote long, 56/34, 163/26; (they) fel both doune humbly at the fote of him,126/14; they followed after at the back of hym, as the younge lambe do the sheep,106/27.

一方、単数が使われるべきであると思える箇所で複数形が使われている例が幾つかある。

When the fayr beatrix, that at her wyndow was lening her hande ouer her brestes,189/11. 古期英語では他のゲルマン語と同様に、breastは男性を指す場合でさえも、複数の意味で使われていることがよくある。

heuens=sky, 43/18, 98/5, 古期英語も同じである。

shores=shore, They were nyghe the lande, where as the sayd mast, and Blanchardyn upon it, was cast of the waves unto the shores, 97/35; he sawe hem in grete nombre, for to fyght nyghe by the see shoris, 162/4.

抽象名詞は近代英語では単数に限られているが、古期英語、中期英語では複数であることがよくある。その場合、単なる行為の時、godnesses, *Orm.Ded.*, 252, 276, etc.か、異なる概念を表す時、twa sarinessse beoth, *O.E.Hom.*, I.103,105; gleadshipes,*Saules Warde*,263、またはある概念の滅

多にない力を表す時である。

whiche boke specyfyeth...of the grete adventures, labours, anguysshes, and many othere grete diseases of theym bothe, 2/3,4; the grete humylyte and *courtoyses* that were in Blauchardyn 50/12; sore wepyng and sorowyng his *byttirnesses*, 114/18; they beganne to make grete festes and grete *Ioyes*, 201/1; 17/11; *Aymon*, 262/29; 17/8, 20/6; 190/13; 98/6,119/36, 132/13.

動詞状名詞の複数形がある。26/3(*wepynges*); 30/11(*the same*); 132/13(*praysynges*), 133/29(*the same*); 174/10(*sobbynges*)などである。

## 格(xi)

### § 4 主格(xi)

中期英語の主格は古期英語よりも広い範囲で使われている。第一の理由として、主格の範囲が広がった。それは屈折がなくなり、主格と他の格が混同されるようになったからである。第二の理由として、それ以前にはなかった統語上の関係で使われるようになったからである。

人称代名詞の主格と対格(または与格)、すなわち*ye*と*you*は15世紀の末まで混同され、結局*you*が主格として使われるようになった。

1、主格の第一の機能は文の主語を示すことである。論理的な主語に関しては、古期英語から近代英語まで変化はない。

2、しかし14、15世紀には、文法上の主語は以前よりもよく使われ、重要になった。

(a) 古期英語では非人称動詞が非常に多く見られたが、中期英語の後半には人称を使う表現となった。すなわち、かつては意味が不明瞭であったようにみえる文が、自由な意思のある、意識的な行為として現れた。*hit hreóweth*, *hit sceameth*, *hit licath*, *hit langath*に代わり、*I repent*, *I am ashamed*, *I*

like, I longとなった。非人称から人称への変化は、二つの外的な要因によるものであった。一つは、*Wo was this kyng*(Chaucer, II, 193)のような文では、間接目的語である格が主格として誤解された。二つ目には、フランス語が大きな影響を与えた。VI.章の非人称動詞(p.xlvii)を参照。

(b) 受動文で与格に代わり、主格が使用されだした。<sup>1</sup> これは直接目的、間接目的をとる他動詞の受動文、前置詞を伴う自動詞の受動文で生じた。これは、最初は与格と対格が混同することから生じた。*command, answer*などの動詞の目的語は与格であったが、対格と考えられるようになり、その結果与格が受動文の主語となった。

しかしカクストンの時代ではこの過程は完全に終えていなかった。それゆえ次のような表現がある。*as was told him by the knyght,43/1; all that was told him,196/20*. 受動態の章(lxi)を参照。

3、絶対主格が古期英語の与格に代わりに使われるようになった。この絶対主格は古期英語の与格の構造(ラテン語に由来するようであるが)よりも、多く使われるようになった。この用法は14世紀に一般になり、カクストンの時代には頻繁に使われるようになった。これは特に関心を引く構文ではない。

*This ansuere y-herde, Alymodes...made his oost to approche,57/28; and that doon,...he shall mowe, 73/24.*

4、主格のもう一つの機能は不定詞との関係である。(xii)

*I say this, be ye redy with good herte/ To al my lust, and that I frely may/ As me best liste do you laughe or smerte, / And neure ye to gruch it night ne day---*Chaucer, II.289. 不定詞の章(p.lxiv)を参照。

## 5 主格と対格を交換して使用すること

(a) 早くも14世紀の半ばに*you*が*ye*の代わりに使われだしたが、主格の*ye*はHenry VIIIの時代(1509-47)まで使われ続けた。

カクストンは概してyeを使っており、youが使われるのは倒置される文のみである（命令文や、数は少ないが疑問文）。しかし倒置文でさえもyeが広く使用されていた。

*Blanchardyn*では命令文で二度youが使われている。Come you with me,60/28; be you sure, 185/17(もっと多くの例は*The Foure Sonnes of Aymon, Morte Darthur*にみられる。)

疑問文では、What be you, fayre knyghte?*Aymon*91/25; tell me, how thynke you?*ibid.* 170/1; what thyng aske you of me? 246/29, 184/31, 291/31, 343/17, 373/29. *Morte Darthur*, 206/6, 240/22. 242/14, 251/29, 255/16, 255/33, 269/8, 279/18, etc.

しかしそれ以外の時にyouが使われている例が数例ある。Cosin, sayd Reynawde, you speke well and wysely,*Aymon*,132/33; now up, Ogyer, and you, duke Naymes, *ibid.*157/23; yf you wyl yelde your selfe to his merci, *ibid.* 189/22; 432/14, 438/10.

(b) 人称代名詞の主格の代わりに与格が使用されている例がある。このよく知られた傾向はフランス語の代名詞は二つのクラス(*conjointe*と*absolus*)に分類されており、it is *me*や*older than me*のような近代英語にみられる。カクストンはIt is *me*や*older than me*を使っていない。彼は常にIt is I。(原注：チャーサーはit am Iを使っている。)を使っている。しかしp.xivのように、その芽生えはみられる。

*Blanchardyn*では、主格を使うべき所で与格が使われ、それは二度みられる。これは一種の混ざりあった構造のようである。And syhn aftre, he lyghtly dyde sette hande on the swerde, of the whiche he smote here and there with bothe his handes by suche a strengthe, that *him* that he rought(=worked, fought) with full stroke was all in to brused(=bruise),63/2. 上記の文では、him that=whom thatであり、he

whomのことである。屈折のないthatを使うことにより、himをheのように思わせている。またand sware that he sholde neuer departe from afore the place unto the tyme that the castel were take, and *theym* of within at his wyll,181/31では、theyの代わりにthemが使われている。

*Aymon*では与格が主格の代わりに使われている。whan these wordes were fynysshed, all the foure brethren, and all *theym* of theyr companye arayed themselfe...*Aymon*, 78/22; ...al *them* of the dongeon defended themselfe valyantlye, *ibid.* 94/12, 212/30.

一方、与格や対格の代わりに主格が使われている顕著な例がある。

But at thentree of a forest that was there, they loste their trayne(=servant), and went oute of ther waye, wherby they myght not folowe nor ouertake the pucell(=damsel), nor *they* that brought her with theym,181/22; Go ayen to Tormaday to see the noble lande of that lady, *she* of whom thou amoureuse so moche,186/19.

16世紀の劇にもこの用法があるが、私はそれ以前や以後にこの用法があるのを知らない。しかし、カクストンの作品や*Sir Clyoman and Sir Clamydes*では、斜格の名詞の同格として、代名詞の斜格を使うべき箇所、主格が使われている。Do never view *thy father*, I, in presence any more.497.a; So do I fly from *tyrant he*, whose heart more hard than flint.515,1; 491,b; 501,b; 505,b; 507,b; 508,a; 511,a; 514,a.

*The Foure Sonnes of Aymon*と*Huon*には、与格の代わりに主格が使われている例がある。Reynawde toke hym,...and made all *they* that were wyth hym...to be hanged and slayne, *Four Sone*,90/19; 127/29; Before you and all your barons I haue dyscomfyted(=defeated) in playn batayll *he* that hath brought you into all this trouble, *Huon*,i.46/10. 他に288/23があり、83, 84, 87ページのthouはyouであるべきであろう。

最後になるが、前置詞のbutやsauf(=save)では対格が使われなくて、これらの前置詞はまるで接続詞のように主格が使われている。Noon but I have seen it, 43/32, Al be ded sauf I, *Charles the Grete*, 102/31.

## § 5 属格(xv)

### (a) 名詞(と代名詞)との関係で使われる属格

この属格の用法は、古期英語では特に詩で無制限に使われていたが、カクストンの時代にはむしろ制限されていた。

1、この用法の第一は、生まれや誕生を示している。(そのためにgenitivusという名がついた。)属格が使われている所で与格も使われている。

My lady Margarete...Moder unto our naturel and souerayn lorde, 1/3; Blanchardyn, sone unto the kyng of Fryse, 1/27; Blanchardyn ansuered that he was of the lande of Grece, and sone to a kyng, 100/1; and sayde to the kyng, fader unto Blanchardyn, 174/18; 83/9. kyng Lots wyf and moder of sir Gawayne and to sire Gaheris, *Morte Darthur*, 357/25; 425/12.

2、目的を示す属格はそれほど使われていない。(xv)

She bereth in her herte care ynough and dyspleysure for the loue of him, 73/33, 76/5, 77/25; for right moche he desyred to shewe hymself, for his ladyes loue, 83/8.

3、属性を示す属格は近代英語と同じように使われている。マロリーは属格と共に比較級、最上級を扱っている。She is the fairest lady and most of beautie in the world, *Morte Darthur*, 357/23, more of beautie, 358/13, 358/18, 360/33, 450/13など多くみられる。ofの代わりにaが使われることがある。yf he had been yet man alyve(=of life), I wolde haue gyuen you tyl his wyff, 93/22; I am not a(=of) power to reward the(=thee) after thy merite, 109/9.

4、代名詞の所有格の代わりに前置詞のofがたびたび使用されている。(xvi)

(I) *knewe wel that the story of hit was honest*, 1/11; *the sowle of the(thee)*, 17/21; *for pryde of her*, 39/14; *the herte of hym*, 39/33, 64/17, 86/20, 87/31, 92/7, 106/17, 114/32, etc.

この用法は次のような文で使われている時に特に注目される。*ye haue exposed the body of you and of your men*, 171/20. この文は近代英語では *your body and those of your men* である。マロリーの作品に、*I pray you hertely to be my good rende and to my sones*, *Morte Darthur*, 406/28

5、部分属格は14, 15世紀にはそれほど使われていなかった。部分属格の用法を当時と古期英語期と比較すると、古期英語のMATHA FELA(=many treasures), *Beowulf* 36に見られる部分という概念は、単純な同格により取って代わろうとしていた。数は多くの不定の副詞、代名詞と同様に、属格を支配しなくなっていた。Chaucer: *A busshel venym*, IV.267; *no morsel bred*, III.215; *the beste galoun wyn*, III.249.

属格の代わりに同格が使われるようになったが、その用法は突然使われなくなった。15世紀末には古期英語の属格を使った用法が好まれるようになった。上に挙げたような表現はカクストンにはみられないし、ほんの僅かに例があるだけである。

*manner*がofを伴わずに使用された例は、*Balnchardyn*には三度見られる。*by al manere wayes*, 50/19, *all manere noureture*, 74/8, *al manere poyntes* 109/16. 一方*maner of*の例は18みられる。28/20, 53/17, 55/27, 58/19, 60, 31, 73/34, 93/32, 111/28, 117/27, 119/2, 119/11, 159/34, 174/12, 177/4, 186/8, 188/26, 197/28, 200/18.

*other*は*others of*の代わりに使われた。*Other her gentyll women*, 76/31; *other his prysoners*, 121/25

*any*も*any of*の代わりに使われた。*Affermyng that I oughte rather ten-*

prynte(=print) his actes and noble feates than of Godefroy of bolonye or  
*ony the eight--Caxton's Preface to Morte Darthur, 2/1*

*Aymon*には14世紀によく使われたと思われる「one of +単数」という奇妙な表現がある。but of all Fraunce I am *one of the best and truest knyght* that be in it, 272/23. これはチョーサーにもみられる。*Oon of the grettest auctour* that men red, III.234; *On of the best farynge man* on lyue, III.8; *On of the best enteched creature*, V.35.

この奇妙な表現は二つの構造が合わさったものである。すなわち、I. *One the best knyght*とII. *One of the best knyghtes*である。最終的には、後者が使われるようになったのであるが、中期英語には前者の構造が何度もみられる。*at two the firste strokes, Morte Darthur, 343/29; two the best knyghtes* that euer were in Arthurs dayes, *ibid.* 419/31.

この同格の用法は、現在ではofが使用されるが、James I(1603-25)の時代まで使われた。Was reckoned *one the wisest* prince that there had reigned. Shakespeare, *Henry III*, II.ii.48.

この表現は別にして、カクストンの部分属格の用法に関して、他の注意すべき点がある。

(a) 「省略のある部分属格(elliptic genitive partitive)」と呼ばれる例が多くみられる。これはチョーサーにもよくみられる。Of smale houndes hadde sche that she fedde, II.5(Prologue 146).<sup>2</sup> チョーサー以前にはこの用法は希である。カクストンには幾つかの例がある。

(She) tolde hym that she was right wel content of his seruyce, and wolde reteyne hym in wages, and gyue hym *of her goodes*, for he was worthy therof.75/5; *Aymon*, 91/18; *Morte Darthur*, 121/10.

この用法はHenry VIII(1509-47)の時代まで続いた。I requyre you, shewe me *of your newes and adventures* that ye haue had, *Huon*, 566/12.

*Huon*の1601年の版から、その当時の人々は散文でこの用法を好まなかったと言える。というのは、元々の版ではfor incontinent they wyll sende of theyr shyppes, and take thys shyp,212/29であるが、1601年の版ではofはsome ofとなっている。

(b) much, many (other)のような不定代名詞の後ろで、of + 名詞が散見する。for he hath doon to us this day so moche of euyl.169/22 . しかし、概して現在の用法が使われている。

(c) もう一つ属格の用法がある。それは適切な名称ではないが、「疑似属格 (pseudo-partitive)」と呼ぶことができる。すなわちa castle of hers, a knight of Arthur'sのような表現である。これらは今日、one of her castles, one of Arthur's knightsと解釈できるが、中期英語期にはそのようには解釈できない例がある。近代英語での用法のthat beautiful face of hers!には部分の概念はない。14世紀またはその後半にみられる最も古い例をよく見てみると、この表現は必要であったことがわかる。

古期英語期には所有格、フランス語でいう「pronominal adjective」は、所有の概念のみを表した。それは純粹に形容詞的であり、今日のように限定の概念を示すことはなかった。それゆえ、古期英語期では名詞を限定したい時には、定冠詞を付加する必要があった。

hæleth mín se leofa,*Elene*,511; thú eart dóhtor mín séo dýreste, *Juliana* 166. 冠詞は所有代名詞の前にあった。se heora cyning, *Orosius*, 56/31.

中期英語では、近代英語、近代ドイツ語、近代フランス語と同様に、所有代名詞は限定する意味があった。そのために、定冠詞を付加すると、それは余剰となった。不定冠詞の場合は余剰であった。そのため戸惑いが生じた。城の数が話し手にも聞き手にも重要ではなく、一つの城を所有している、すなわち「彼女の所有している一つの城」(she is in a castle belonging to her)とりたい場合、中期英語期の英国人はそれを表現できなくなった。当時のフ

ランス人はun sien castelと表現できたが、英語ではこの表現はできなかった。私の知る限り、中期英語初期には「不定冠詞＋所有格」の例が一つだけある。*Sawles Warde(O.E.H.,I.p.265)* for euech an is al mihti to don al that he wule, ye, makie to cwakien heouene ba ant eorthe with *his an finger*(=for one is mighty enough to do all that he desires, yea, to make heaven and earth quake with *one of his fingers*),(R.Morris訳)

そのために近代ドイツ語にあるようなof meの表現が生じた。「前置詞＋目的格」が広まった時期があったかもしれない。しかし英語はof mine, of thineのようなof meよりも複雑で、むしろ馬鹿げた表現を使うことになった。

「前置詞＋目的格」の表現はおそらく、限定されていない名詞はmineが使われることが多く、部分を示したことの類推や、所有格を伴う古い構造に似ていることから生じたのであろう。

この説明は推測である。一つだけ確実なことは、不定冠詞が所有格と結び付く可能性はないということである。次のように変化したという事実により証明できる。

I 最初に不定冠詞(または、any, every, no)の不定を示す語が、of mine, of thineなどと結び付いた。この構造は14世紀にみられる。例：a friend of mine.

II 次にこの類推により、不定冠詞が名詞の二重属格と結び付いた。a knyght of king Arthur's

III 最後に、this, thatの不定代名詞がof mineと結び付いた。定冠詞も名詞の二重の属格と結び付いた。the knyght of kyng Arthur's.

チョーサーの例の例を挙げる。a friend of his, IV.130, IV.257, IV.356; an hors of his, II.271, an old felaw of youres, III.97; eny neghebour of myne, III.198; every knyght of his, II.239; no maner lym of his, V.170; cf. that ilke proverbe of Ecclesiaste, II.226; *this my sentence heere*, III.40; oure wreche

is *this*, *oure owen wo to drynke*, IV.184

カクストンはIの範疇に入る文は多くみられる。And for this cause departeth now my said lady from *a castell of hers*,38/6(原文: *dun sien chas-tel*); He toke also a grete spere from the hande of *a knyght of his*, 107/32; for the kyng Alymodes hath a daughter of his owne...125/4; a yeoman of his owne, 201/18; a town of his,*Aymon* 69/15, 412/29, 527/22.

IIの範疇の例は*Morte Darthur*に度々現れる。a kyghte of the dukes, 37/7,9; Syre gawayne, knyghte of kyng Arthurs, 146/32; I am a knyghte of kyng Arthurs, 153/32, 263/31, 263/34, 330/22, 331/19; a trusty frende of Sir Tristrams, 363/8; and therewith foure knyghtes of kyng Markes drewe their swerdes to slee syre Sadok, 469/30. 次の二つの例ではsが見られない。Thenne came forth a knyght, his name was lambegus, and he was a knyght of syr Trystem, 318/16; there was a knyghte of kyng Arthur, 331/17.

Arthurと彼の騎士との関係で、この用法がよく使われているが、この用法には一種の省略があると考えられる。a knyghte of kyng Arthurs = a knyghte of kyng Arthurs *court*のことである。しかし、上記の例でa trusty frende of Sir Tristrams(363/8), I am forester of the Emperorsのような例は、among Sir T.'s friends, among the Emperor's forestersのことである。すなわち、houseやcourtの省略ではない。カクストンやマロリーにはこの省略の例は他にはみられない。

IIIの範疇に関しては、*Blancheardyn*には*that*を伴った例は二つあり、*Morte Darthur*には定冠詞の例が数例ある。as for to wene to haue her, thou haste *that berde of thyne* ouer whyte therto; thy face is so mykel wonne, and *that olde skynne of thyne* ys ouer mykel shronken togyder, 186/22-25(原文: *vous auez la barbe trop grise, la face trop usee, et le cuir trop retait.*)

上記以外では、カクストンは所有格とthisを使っている。this my towne, 73/18; this her werre, 90/1.

*Morte Darthur*にはⅢの範疇に入る例が二つある。Alle the knyghtes of kyng Arthures, 330/9; he sholde haue her and her landes of her faders that sholde falle to her, 488/14. この2例とも部分属格ではない。<sup>3</sup>

B 形容詞や動詞が支配する属格は、概して近代英語と同じである。しかしカクストンでは、関係、原因という概念はofで表現される。近代英語ではofの代わりにin, as to, withなどの前置詞が好まれる。

(a) 関係

The childe grewe and amended sore of the grete beaute...13/6; of the tables and ches palyng, and honeste talkynge, he passed them that were his elder in age, 13/9; demaunding of the batailles of Troy, 14/13, 15/8; sore troubled of wyttis, 45/8; nought dommage of nothing, 48/31; there was no man that of prowes and worthynes coude go beyonde hym 65/21, 99/14, 145/30, what wyl you do of me?, 146/16. cf. 150/25, 178/21, 184/6, 193/14; *Aymon*, 54/25, 64/5, 290/32.

(b) 原因

(They) judged hem self right happy of a successoure legytime, 12/17; (the kyng) that of this adventure was ful sory and dolaunt(=grieved), 21/4; sore passioned of one accident, 68/20; thank of, 49/33, 60/25; pardon of, 50/9, 10.

ofの代わりに時々ouerが使われている。Right enamored they were ouer hym, 66/25; auenged ouer hym, 86/30. for ofが一例ある。and also for of the grete dyspleasure that he had...111/34

(c) 属格の副詞的用法に関しては、副詞の項(p.lxxvii)を参照。

## § 6 与格(xxiii)

古期英語の屈折が消滅すると、前置詞toで与格が示される傾向があった。しかし*Old English Homilies*が書かれた時から近代英語期まで、必ずtoが使われたわけではない。

カクストンでは、現在なら使用しないところで、toを使っていることが多かった。特にtellと共にである。

Now anon brynge to me myn armes, *Charles the Grete*48/15; しかし同じページに、he shold brynge hym hys armes, 1.4; after brought he hym hys hors, 122; I assure to you by my faith that I shall do it...*ibid.*49/30; I graunte to you alle my goodes, *ibid.*50/3; cf. *Blanchardyn*, 20/17; *Aymon*, 362/31, 367/9.

tellと共に。and whan thou hast told to me thy name, *Charles the Grete*,53/16; I telle to the, *ibid.*54/17, cf.55/2, 57/23, 61/3, 86/5, etc.

demandは大抵ofを伴った。しかし例外はあり、それは恐らくフランス語の影響であろう。Thenne cam kyng Almodes forthe, and demaunded to the stywarde, 283/23. reguireもtoを伴った。Blanchardyn, 168/3. askは二つの目的語を伴うと前置詞を伴った。(he) asked for hym to two of his men, *Aymon*. 362/31.

offend to の例は一例ある。Yf there be ony man here that I haue offend-ed unto, *Morte Darthur*,292/19.

心的与格(Ethic Dative)はカクストンにはそれほどみられない。

A right grete and impetuouse tempeste rose, that lasted us thre dayes, 100/9; their sorrowe redoubled them full sore, 119/34. チョーサーの例として、But ye withdrawen me this man, *Boethius*, カクストンはこれをfro me としている。

## § 7 対格(xxiv)

A. 対格は他動詞により支配されるが、カクストンでは現在の用法と異なる。

上記のdemand, require, serve, tellの他にbeholdがあり、これはofを伴った。e.g. *Aymon*, 391/26. 特に注意すべきはswearであり、中期英語ではonを伴った。チョーサーのIV.363とthis on every God celestial I swere it yow, V.222に例がある。カクストンはswearを他動詞として使い、対格を伴っている。he sware his Godes, 92/25, 107/22; swore God, *Aymon*, 38/4, 73/14, 87/10, 185/4, 201/33, 459/11, 471/7, 515/7, 526/17. *Aymon*では前置詞を伴う例は三例しかない。(he) sware by God, *Aymon*, 61/29, he sware by saint Denys, *ibid.*411/11; I swere upon all sayntes, *ibid.*85/4.

*Ayenbite*や*Blanchardyn*の例から、この用法はフランス語の影響であると言えることができるであろう。The kynge of polonye(=Poland) sware his goode goddes, that he sholde neuer haue joye at his herte, 107/22(原文: jura ses bons dieux.)

Dan Michelは常に文字通り訳している。カクストンもこの場合フランス語の構文を使っている。

同族目的(Cognate Object)は数回みられる。

And there she had not been no longe whyle, when she had *perceyued* the playn *choys and syght* of a right grete and myghty nauye, 56/2(choys=sight), *deye* a shamefull *dethe*, 190/4; 他のカクストンの作品にも度々みられる。I rebuke hym neuer for no *hate* that I *hated* hym, *Morte Darthur*, 349/4; the good *loue* that I haue *loued* you...*ibid.*364/4.

B. 絶対対格(accusative absolute)はカクストン、マロリーさらにはBernersでも頻繁に使われている。例は非常に多くみられる。数例を挙げる。

He fonde hym *the terres*(=tears) *at the eyes of him* makynge his full pituouse *complayntes*, 123/24; (there) he toke a bote, prest and garnysshed

with eight goode felawes, *eche of them an ore in his hande*...154/7; Thenne came syluayn, *his felawes with hym*, and ascryed the two barons to dethe, 205/19(Original:siluain auant avec ses compaignons.); 180/19.

C. 不定詞付き対格(Accusative with Infinitive)は不定詞の項p.lxx.を参照。(xxv)

D. 副詞的目的語(Adverbial Object)は特徴がある。

(a) 時間

*Never the days of her lyff she sholde wedde paynem(=pagan) nor no man infidele(=heathen)*, 65/15. マロリーには *neuer his life*, 127/23 の例がある。チョーサーの例、*Imeneus, that god of weddyng is, Seigh neuer his lif so mery a weddid man*, II.333; *many a wighte hath loued thyng he neuer saugh his lyue*, V.8. (he) *wend neuer to haue come tyme enough*, 158/4(Original: a tans (temps)). Cf. 170/5; *Aymon*, 265/19, 343/5; *Morte Darthur*, 228/24; *Huon*, 332/8, 334/10.

*that tyme*, *Morte Darthur*, 48/8は *at that tyme*, *ibid.*49/16にもみられる。*the same tyme*.127/13, 128/8, 143/29; *at that same houre*, 139/8; *at the tyme*, 194/32; *Morte Darthur*, 363/35. 助格は *sometyme he was putte to the werse by male fortune*, and *at sometye the wers knyghte putte the better knyghte to a rebuke*, 356/7,8. にもみられる。

(b) 様態

*Seeyng that noon otherwyse he myghte doo*, 30/26; and *noon otherwyse wyll I doo*, 93/25; *the best wyse that he myght or coude*, he ordeyned his bataylles, 162/27, 171/32. しかし前置詞を使った例もある。*in like wise*, 98/23; *in the best wyse*, 125/24, 166/2.

チョーサーは *other wyse* を使っていないで、*other weye*, *other weyes* を使っている。

## 注

- 1 古期英語では与格は受動文の主語にならなかった。
- 2 大山俊一編『カンタベリー物語・プロローグ』(昭和31年)には、ofはpartitiveのofでsome (of) little dogsと注がある。
- 3 a friend of my/ a book of my brother'sについて、清水護編『英文法辞典』(倍風館)のDouble Genitive の項を引用しておく。

属格が後ろに置かれているので、Post-genitive(後置属格)という人もいる。属格によって修飾される語はI have him an old raincoat of my brother's.のように不定冠詞をとまうばかりではなく、the picture of Turner's that I like best. It was no fault of the doctor's.のように定冠詞、代名詞、数詞を伴ったり、複数形で示されたりする。後置される属格は人に限られる。ところで、a book of my brother'sはa book of my brother's booksでofはsome of usの場合のように部分を示す(Partitive)とする説明は、広く行われ、一応首肯できるが、that long nose of Tom'sのような場合は、the City of Rome=the City which is Romeの場合同様にthat long nose which is Tom's、すなわち同格(Appositive)と解さざるを得ない。従って、学者によっては、元来、部分を示す用法であったものが次第に使用範囲を拡張してその他の関係も示すようになったとみる。その他の関係のなかには、同格関係ばかりではなく、所有関係、主格関係(the slaughter of the king's)など、多岐にわたるので、ofの持つ複雑な性格とあいまって一元的な説明をするのは困難である。なお、属格がくるか否かによって、意味の相違を来す場合、a picture of my father's(父の所有している絵)/ a picture of my father(父の描いた絵)と、a play of Shakespeare's=a play of Shakespeareのように意味の相違をきたさない場合とがある。